

マルタ史試論－２（1676年から現代まで）

関根 謙司*

Malta has shown us a history that extends back much longer than Ancient Egypt and has a number of unique aspects. I have viewed the aspects of Maltese history from BC. 5000 until AD. 1676 on the Part One. And on the Part Two I shall summarize the aspects of Maltese history from AD. 1676 until the present times. Through the Maltese history, I will get the real appearance that the small country shows us. Also I shall try critical studies about Napoleon's invasion, British Colonial times and political situation after the independence of Malta.

Key Words : Malta, Knights of St. John of Jerusalem, Nationalism, Anton Vassallo, Dun Karm

1. 騎士団とマルタの文芸復興

マルタ騎士団（イェルサレム聖ヨハネ騎士団）の時代（1530-1798），騎士団長を頂点に置きながらも，カトリックの司教との間にしばしば問題が生じた。騎士団の中にあっても8ヶ国の利害が対立し，なかなか同意が得られなかった。そんなとき，言いたいことは最後まで言い，それから解決策を求めるといふマルタ人気質が育ったといえる。マルタの人名にはいまでも西欧諸国のキリスト教徒やユダヤ教徒を彷彿させる名が少なくない。その人の苗字で出身と由来が分かるのである（注1）。

マルタ騎士団の時代は中世の悪しき習慣を踏襲しながらも，文化の興隆も芽生えた時代でもあった。騎士団長アロフィウス・ド・ヴィニヤクトルの庇護を求めて，ローマで殺人事件を起こし，ローマを追われた画家のミケランジェロ・メリージ・ダ・カラヴァッジョ（Michelangelo Merisi da Caravaggio, 1571-1610）がマルタに来訪し，聖ヨハネ教会のために「洗礼者ヨハネの斬首」（1608年）を描いている（注2）。

マルタ騎士団による慈善事業はほぼ270年間におよび，医療や社会活動による活動の支援を

*人間学部コミュニケーション社会学科

受けた人々は1万5千人から11万4千人に拡大していた。1625年にはヴァレッタで婦人病院が活動を開始した。騎士団の活動は、慈善医療活動、貧困対策、路上物乞い者対策、あるいは主としてバルバリア海賊によってイスラム海賊に拉致された男女の奴隷解放交渉に及んだ。1597年には奴隷解放のための金銀を低金利で貸与する公的質屋である Monte di Pietà（信仰の山）が創設された。また、1607年には救援基金である Monte di Redenzione（贖罪の山）も設立された。すでに1347年には後に Santo Spirito（聖なる精神）として知られる聖フランチェスコ病院がマルタに創設され、活動を始めていた。この活動を支えたのは、騎士団による3つの組織であった。その1つの聖ジュリアン病院は、ゴゾ島でも活動を行った。薬剤師や外科医たちがフランスやイギリスから騎士慈善団の管理のもとに渡来した。騎士団によって設立され、活動した医療施設は19世紀と20世紀にも活動を続け、第二次世界大戦の間も活動を止めることはなかった（注3）。

騎士団の時代はまた、マルタ語文芸復興が起き（注4）、マルタ語の最初の文法書が編纂された時代であった。騎士団の出身地は、言語別・習慣別にプロヴァンス、オーヴェルニュ、イタリア、カタラン（アラゴン、カタルーニャ、ナバーラ）、イングランド、ドイツ、ポルトガル、カスティリア（スペイン）の8つの地域に分けられており、以前からマルタ島ならびにゴゾ島に住んでいた人は、フェニキア語を母胎としヘブライ語の語彙が流入したアラビア語の北アフリカ方言やマシシュレク方言が混ざった言語を使用していた。騎士団のメンバーは共通語としてラテン語、のちにはフランス語を使い、その一方で日常的には自分たちの出身地の言語を使用していた（注5）。中世には稀にアラビア文字で書かれることもあったことは中世の歌詞を書き留めた写本が残っていることから知られる（注6）。17世紀になると、騎士団の貴族たちは教養としてフランス語やイタリア語を使うことが少なくなかった。

イタリア語で書かれたマルタについての初期の著書は、1409年に遡ることができる。最初のマルタ史についての著書（Antonio Pugliese, *La Histoiria di Malta nuovamente composta in ottovarrima*, Venezia, 1585）はヴェネツィアで刊行されており、現在、マルタの国立図書館（National Library of Malta）に保存されている。後期のもものでは、マルタに5年間滞在したイタリアの作家ベッローニ（Vincenzo Belloni, 1839-1878）がマルタで出版した叙事詩『マルタの聖パウロ』（*San Paolo a Malta*）がある。マルタで出版されたイタリア語の著書としては、マルツリ（Geronimo Marulli）の『宗教騎士団の創設』（*I Natali delle Religiose Militiae de' Cavalieri*, 1643）があり、マルタで出版されたイタリア語の著書は、歴史や文芸を中心に確実に発展していった（注7）。

18世紀のマルタは、イタリア文化に影響を受け、マルタ人としてのナショナリズムに芽生えた時代であった。騎士団たちは、当時のカトリック教世界を反映して公文書としてラテン語で著述し、外交文書にはフランス語を使用していた。マルタにおける最初のイタリア語の著作は、1409年のフランシスカ・ガットゥ（Franciscu Gattu）の残したものが残っている。彼はマルタの官僚兼外交官に選ばれた人物で、アラゴンやシチリアと交渉するときにイタリア語を使用した。また、1419年、マルタの官僚から提督に宛てた別の文書が残っている。騎士団の時

代からマルタは、地理的にも近いイタリアと深い関係を持ち、文化的にも政治経済的にも大きな影響を受けてきた（注8）。

こうした動きに影響されたかのように、ローマ字を使ったマルタ語の正字法が確立され、マルタ語の研究が進んだ。ヴァッサリ（Mikiel Anton Vassalli, 1764-1829）は、ローマで『マルタ語語彙集』（*Vocabolario maltese*, 1796）を出版し、同書の序文（*Discorso preliminare*）でマルタ語研究の基礎を築いたのである。マルタ語については、それまでは論争が絶えず、フランスのアラビア語学者サーシーはフェニキア語の方言だという見解を展開していたし、またフランチェスコ・スルターナはフェニキア語の生き残りだと指摘し、マルタ語はフェニキア語と謎の言語エトルリア語の関係の痕跡が見られると論じた（注9）。今日から見ると驚く見解だが、それだけ口語アラビア語についての知識が不足していた指摘であったと思われる。それにしても、北アフリカ方言のアラビア語よりも、レバントのアラビア語により影響されたマルタ語は興味深いといえる（注10）。

マルタは、地理的にも近いイタリアからは料理作法などから大きな影響を受けた。イタリア、とくにヴェネツィアからは造船や湾岸整備などで大きな影響を受けた（注11）。

マルタにとって、オスマントルコは脅威ではなくなっていた。騎士団もかつての勇猛で勇敢な存在ではなくなり、貴族丸出しの生活を楽しんだ（注12）。そして、金も出すが口も出す教皇庁から派遣された司教におべっかを使うようになっていた。

それでも、マルタにおける近代法は着々と進められていた。1784年には騎士団長ロハン（Rohan）による有名なロハン法が発布されている（注13）。

2. ナポレオンの侵入とフランスの支配

1798年6月9日、ナポレオン・ボナパルトが率いる艦隊がマルタを襲った。当初、ナポレオンはエジプト遠征の途上にあり、飲用水補給の自由をマルタ騎士団長に求めてきた。しかし、それが拒否されると水と食料が限界にきていたこともあり、ナポレオンは艦隊から威嚇砲撃を開始した。ヨーロッパ最強の要塞をもち、オスマントルコの大軍と艦隊を撃破した士気はすでにマルタにはなく、ナポレオンはその余りにも弱体な騎士団に唾然とした（注14）。マルタ騎士団はマルタからの撤退の条件を出してきた。

当初、ナポレオンはマルタに長く滞在する予定はなかった。しかし、イムディーナのシャーラ宮殿にいた18歳の美しいクララ・シャーラ（Clara Xara）にナポレオンは魅了された。ナポレオンはマルタでの滞在を1日1日と延期した。そのたびに口実のようにナポレオンはマルタにフランス革命で培われた自由・平等・博愛に根差した法律を布告した。スペインからもたらされた悪名高い異端審問がマルタで禁止されたのもこのときである。クララはナポレオンと結婚し、子供をもうけることを望んでいたといわれる。若いマルタの女性がマルタの近代化、法整備に大きく貢献したのである（注15）。ナポレオンはクララを愛しながらも、「自分と結婚

すると君が不幸になる」と忠言したと言われる。クララはエジプトに旅立つナポレオンと別れたのち、家族のもってきた縁談を受諾した。1821年5月5日、流刑されたセント・ヘレナ島でナポレオンが死去した報を受け、クララは夫を亡くした妻が着るファルデッタを身につけ、生涯、けして脱ごうとしなかったという（注16）。ナポレオンは、マルタを去る際、一部のフランス軍を残してエジプト遠征に旅立った。

ナポレオンにマルタの司令官を任命され、3053名のフランス軍と5門の大砲を任せられたヴァロワ将軍は、気軽にして心優しい人物であった。マルタ人にとって、将軍の政策は最善であり、バランスの取れたものであった。ナポレオンがもたらしたフランス革命の理念である「自由・平等・博愛」は徐々にマルタに浸透し、騎士団の貴族的な統治を徐々に変えていく結果になった（注17）。

しかし、ナポレオンのマルタ滞在中からフランス兵たちの行動はしばしばマルタ人の不平や不満を買った。フランス兵や兵士や水兵たちの妻たちはマルタの農村に損害を与えることがあったが、その補償を支払うことを拒否したばかりか、フランス政府が補修の修復などを約束することもなかった。その総額は30万フランに達した。マルタ島に留まっていた騎士団はマルタ人の家族に年俵を支払ったり、住居を都合つけたりした。両シチリア王国も綿花を運ぶ船の停泊や補修に便宜を払った。

それでも、ナポレオンとフランス軍がマルタにもたらしたものは、高く評価されるべきである。フランス革命に倣い、教会を破壊したものの、何よりもマルタの近代法は整備されたのである。ヴァロワ将軍は、人柄とは反対に行動は暴君で、教会には容赦なかった。長い騎士団の統治は、マルタの人々にキリスト教を根づかしていることをフランス軍は知らなかったのである。

1798年9月2日の日曜日、カルミネ教会でタピストリーや貴金属のオークションが開かれることになっていた。2名の書記官が商品を運んだが、教会の回りに人々が集まっており、販売は無理そうであった。合図の鐘が鳴り響くと、Zebbug村とSiggiewi村から来ていた人々がラバトの旧市街に雪崩れ込んだ。町は人で溢れた。町を守っていたフランス軍の守備隊の司令官が町に入った。一人の少年が石を投げたので、剣で少年を切りかかった。マルタ人は、司令官に襲いかかった。司令官はNotary Bezzinaの宮殿に逃げ込んだが、すでに遅かった。群衆は宮殿を破壊し、窓から司令官を引き出した。一瞬のうちに死に絶えた。すぐさま各村に伝令が走り、ラバトの人々が反乱を起こしたため、フランス兵たちは援助を求めた。

ヴァレッタにも知らせが届いた。城壁の門は閉ざされ、通路は監視された。こうして、議会の前で戦闘が勃発したのである。翌日には、守備隊を援護するためにヴァロワ将軍は200名の兵士を送ったが、守備隊の兵士たちは致命的な損害を蒙った。ラバトでも反乱が起きた。フランス軍の守備隊のうち、65名が捕虜になった。さらに4名のマルタ人が町に火をつけた。各地の暴動はなかなか収まらなかった。9月4日、マルタ島とゴゾ島の市民の代表が集まって会合を開いた。その結果、両シチリア王国に仲介を頼んだ（注18）。

この時、イギリスはマルタを手に入れる意思は少しもなかった。それでも、10月3日にはマルタで起きた事件についてナポリ滞在のイギリス大使サー・ウィリアム・ハミルトン（Sir William Hamilton）のもとに連絡が届いた。ネルソン提督はマルタをフランスから奪還することがナポレオン戦争で勝利を収める近道だと考えており、その意見も付言した。10月4日にはネルソン提督は、盟友アレキサンダー・ジョン・ボール（Alexander John Ball of H.M.S.）艦長の率いるフルゲート艦とともにスループ型帆船、焼き討ち船をマルタに向けて出航させている。同時にポルトガルとともに海路を封鎖した。同月24日、マルタに到着し、海上を包囲した。マルタで起きていることを詳しく調査した結果、フランス軍はよく組織され、強力である一方、マルタ人の部隊も意気は高く、勇敢に戦っていた。

反仏運動の指導者として歴史に名前を残す人物が二人いる。一人はロシアのkolseia（雇われ海賊）の船長であったグリエルモ・ロレンツイ（Guglielmo Lorenzi）であった。船長は、共謀した仲間を裏切ることを拒絶し、ひずむことなく死を選んだ。もう一人の指導者が、いまもマルタ人から民族主義者にして国民的英雄として敬愛されるミキエル・シェッリ（Mikiel Xerri）神父である。善良にして勇敢な神父は、ドン・ミキエル（Don Mikiel）としても知られ、現在、首都ヴァレッタには彼の銅像も建てられている（注19）。彼は、44名の仲間とともに絞首刑を宣告された。騎士団の宮殿広場で処刑されることになり、そこに向かう途中、見守る群衆を励ましたといわれる。

ヴァレッタの城壁が崩壊したのを機にイギリス軍が両シチリア王の名のもとに島を制圧した。1800年9月、フランス軍は砦を引き渡し、イギリスの支配が始まった。1798年から始まるフランスによるマルタの統治に対するマルタ人の反乱をマルタのナショナリズムの始まりとしてとらえ、「短い栄光のエピソード」として指摘する歴史家は多い（注20）。

3. 人口の推移

マルタ騎士団としてマルタ島に騎士団が渡来した16世紀のころ、マルタの人口は2万5千人ほどでしかなかった。ナポレオンがマルタに上陸した1798年はすでに人口は10万人になっていた。19世紀から20世紀を通じてのイギリス支配の時代、マルタは確実に人口を増加させ、ナショナリズムに目覚め、反英運動を推進していったといえる。現在の人口過密国家としてのマルタの原型はすでにこのころから始まったといえる。夏場はほとんど雨の降らないマルタは、冬場の水のみが頼りである。半分を海水を濾過したものに、残り半分を雨水に頼るマルタは、イギリスがジブラルタルとスエズの補給地ならびに船舶の補修地として、また地中海交易の中継地としてマルタを位置づけたときから、独自の発展を遂げたともいえる。

[表 1]

マルタにおける人口の推移				
年号	人口総数	マルタ人	非マルタ人	備 考
870 年	9,000 人			イスラム支配時代
1054 年頃	5,000 人			ビザンチン支配時代
1224 年	7,000 人			イスラム教徒の追放
1240 年頃			220 人	駐屯軍とその家族
1241 年	10,000 人			Gilibertus の報告
1283 年			300 人	カタロニアの兵士到来
1419 年	8,500 人			
1429 年	5,500 人			ムーア人が侵略, 3000 人が連れ去られる
1480 年	10,000 人			人口増加率は年 1%
1528 年	17,000 人			
1530 年	20,000 人	17,000 人	3,000 人	騎士団の到来
1547-50 年	13,000 人	10,000 人	3,000 人	オスマントルコ軍の襲撃
1565 年	14,000 人	10,000 人	4,000 人	騎士団の援軍到来
1582 年	23,000 人	20,000 人	3,000 人	
1590 年	32,290 人	28,864 人	3,426 人	
1614 年	44,500 人	41,084 人	3,500 人	人口増加率は年 1.4%
1617 年	48,000 人	43,798 人	4,000 人	
1632 年	52,900 人	43,550 人	4,350 人	
1680 年	55,679 人	51,329 人	4,350 人	
1740 年	79,670 人	75,320 人	4,350 人	
1784 年	94,519 人	90,169 人	4,350 人	
1797 年	100,506 人	96,156 人	4,350 人	
1807 年	120,558 人	98,558 人	22,000 人	イギリス軍の侵入
1823 年	112,000 人			
1842 年	114,500 人	112,500 人	2,000 人	人口増加率は年 1%
1871 年	140,000 人			
1891 年	165,000 人			
1906 年	205,000 人			
1939 年	280,000 人			
	320,000 人			
1965 年	316,440 人		47,804 人	旅行者が押し寄せる
1988 年	349,014 人		783,846 人	旅行者がリゾートに来る
2013 年		411,277 人	5,041 人	夏季リゾート客が約 100 万人ほど

(参考) 主として Jacques Godechot, *Histoire de Malte*, Paris, 1952, p.28, p.95, Joseph M. Brincat, "Language and Demography" in Stanly Flrinni & Victor Mallia-Milanes ed., *Malta – A Case Study in International Cross-Currents*, Malta, 1991, p.102 より作成.

フェニキアや古代ローマの船舶の寄港地として使用されてきたマルタは、イスラム時代以降は、多くのイスラム教徒たちが住むところとなっていた。最後のイスラム教徒がマルタ島から追放される1249年まで、マルタ島はイスラム教徒が、ゴゾ島はキリスト教徒が多く住む場所であった。マルタのキリスト教徒は島内のイスラム教徒を追放するとともに、騎士団が到来するとともに防備を固め、1551年と1566年にはシチリア島から労働者を受け入れている。すでに騎士団の時代からマルタの女性との結婚あるいは内婚が進んでいた。現在のマルタ人の苗字に見られる、フランス語系、イタリア語系、カスティリア語系、カタロニア語系、英語系はそれを物語っている（注21）。

イギリス支配下のマルタでの非マルタ人が5%前後を占めてきた。マルタを統治するイギリスは、当初、20%前後の軍を導入するとともに、1818年から1842年までの間に2万人が移民として海を渡った。20世紀にはさらに加速し、1945年から1983年の間にのべ150,509人のマルタ人が仕事を求めて海外に移住した。

2013年7月の統計によると、マルタの人口は411,277人であり、またソマリアからの難民が5,041人（2012年）、さらに夏のバカンス・シーズンには人口40万人ほどに対して100万人ほどの観光客が訪れ、住民の70%ほどは何らかの意味で観光業に関係しているといわれる（注22）。

4. イギリスの支配

イギリスが海洋貿易でマルタを重視するようになるのは、スペイン王位継承問題に関与し、1713年のユトレヒト条約でジブラルタルを手に入れたときから始まったといえる。フランスと領土獲得問題で対立し、1756年の七年戦争で勝利し、地中海はイギリスの海に化しつつあった。教皇庁の権威は失墜し、小国に分裂していた統一以前のイタリアは、スペイン、オーストリア、オスマントルコ、イギリスなどが狙う地中海の要所になりつつあった。

1799年2月11日、ポール艦長はサン・アントン宮殿で国民議会を招集した。これはイギリスがマルタの重要性を認識し、ナポレオンとの戦争を有利に進めるものであった。1800年にはマルタはイギリスにとって「Little England」と呼ばれるようになっていった。それはイギリスの他のコロニーと連鎖するものとなったことを意味した。1814年、パリ条約が結ばれ、ナポレオンは失脚するとともに大西洋の孤島セント・ヘレナに流刑となった。イギリスはこの条約を契機にマルタを正式に大英帝国の1つに組み入れることに成功した。パリ条約は翌年のウィーン会議で確認されることになる。

19世紀のイギリスは産業革命によって世界をリードしており、マルタはアイルランドとともにヨーロッパにある植民地として、イギリスという世界の工場として、海のある重要基地として位置づけた。このころから、イギリスは3C政策の延長として、またインド洋へ最短でつなぐ「スエズ運河の夢」（注23）の実現を推進していたといえる。

イギリスは産業革命によって得た富を自分たちの国では体験できない風土や自然を体験する

ことに費やしたところから、観光業を発展させた。地中海は、冷たい大西洋しか知らない19世紀のイギリスの富裕層にとって、楽園そのものであった。マルタの観光案内の書籍が出版され（注24）、中世世界を舞台に多くの作品を残した作家スコット（Sir Walter Scott, 1771-1832）もマルタに赴き、日記兼滞在記を残している（注25）。

アメリカ合衆国の長老派（プレスビテリアン）教会は、東方教会のキリスト教徒が多く住むレバノンやシリアへの布教の基地としてマルタに注目し、レバノンのマロン派のキリスト教徒の文学者のシドヤークを「聖書」のアラビア語訳の校閲者として招聘している。シドヤークはその体験から『マルタの描写』を書き上げている（注26）。西欧とアラブ世界、キリスト教とイスラム教の間に生きたシドヤークは（注27）、そのマルタ体験から悪漢小説ともいえる『フェアリヤークの冒険』を出版している（注28）。

しかし、イギリスにとってマルタの植民地支配は決して容易なものではなかった。イギリスは騎士団の時代に培われた熱心すぎるまでのカトリック教会と教皇庁との関係に苦慮した。1828年、イギリスはバチカンの教会権を政府のものにし、聖域の権利を停止した。しかし、それは得策ではないと考えると、1831年には教会の権利を認め、モスタ（Mosta）のドームの建設が始まった。その一方で、1835年にはイギリス統治下で初めての議会が招集された。1839年には出版物の検閲が禁止され、1847年にはオーフェラルのようなマルタの総督にはカトリック教徒のアイルランド出身の官僚が着任するようになった。しかし、1846年にはカーニヴァルの最中に暴動が勃発し、マルタ人との融合と和解が必要となってきた。ヨーロッパの革命の年の翌年の1849年には議会の議員の選挙が始まった。

[表2]

イギリス統治下におけるマルタの歴代の高等弁務官と総督（1799-1964）		
英文名	日本語名	在位期間
Capt. Alexander Ball	アレキサンダー・ボール大尉	1799-1801
Maj. Gen. H. Pigot	ピゴット将軍（*）	1801
【高等弁務官】		
Sir Charles Cameron	サー・チャールズ・カメロン	1801-1802
Rear-Adm. Sir Alexander Ball	サー・アレキサンダー・ボール海軍少将	1802-1810
Lt.-Gen. Sir Hilderbrand Oakes	サー・ヒルダブランド・オークス少将	1810-1813
【総督】		
Lt.-Gen. Sir Thomas Maitland	サー・トーマス・メイトランド少将	1813-1824
Gen. the Marquess of Hastings	ハステイング侯爵 大将	1824-1826
Maj.-Gen. Sir Frederick Cavendish Ponsonby	サー・フレデリック・カヴェンディッシュ・ポンソンビー将軍（*）	1827-1836
Lt.-Gen. Sir Henry F. Bouverie	サー・ヘンリー・バヴェリー少将	1836-1843
Lt.-Gen. Sir Patrick Stuart	サー・パトリック・スチュアート少将	1843-1847
The Rt. Hon. Richard More O'Ferall	リチャード・モア・オーフェラル閣下	1847-1851

Maj.-Gen. Sir Willam Reid	サー・ウィリアム・レイド将軍 (**)	1851-1858
Lt.-Gen. Sir John Gaspard Le Marchant	サー・ジョン・ガスパード・ル・マーチャント少将	1858-1864
Lt.-Gen. Sir Henry Storkes	サー・ヘンリ・ストークス少将	1864-1867
Gen. Sir Patrik Grand	サー・パトリック・グラント大将	1867-1872
Gen. Sir Charles T. van Straubenzee	サー・チャールズ・ヴァン・ストローベンズイー大将	1872-1878
Gen. Sir Arthur Borton	サー・アーサー・ボートン大将	1878-1884
Gen. Sir John Lintorn Simmons	サー・ジョン・リントーン・シモンズ大将	1884-1888
Lt.-Gen. Sir Henry D. Torrens	サー・ヘンリ・トレンス少将	1888-1890
Lt.-Gen. Sir Henry A. Smyth	サー・ヘンリ・スミス少将	1890-1893
Gen. Sir Arthur J.L. Fremantle	サー・アーサー・J.L.・フレンマントル大将	1893-1899
Lt.-Gen. Lord Grenfell	ロード・グレンフェル少将	1899-1903
Gen. Sir Charles Mansfield Clarke	サー・チャールズ・マンسفールド・クラーク大将	1903-1907
Lt.-Gen. Sir Henry F. Grant	サー・ヘンリ・グラント少将	1907-1909
Gen. Sir H.M. Leslie Rundle	サー・レスリー・ランドル大将	1909-1915
FM Lord Mathuen	マスエン卿	1915-1919
FM Viscout Plumer	ブラマー子爵	1919-1924
Gen. Sir Walter N. Congreve	サー・ウォルター・コングレーヴ大将	1924-1927
Gen. Sir John P. du Cane	サー・ジョン・デュ・ケーン大将	1927-1931
Gen. Sir David G.M. Cambell	サー・デヴィッド・カンベル大将	1931-1936
Gen. Sir Charles Bonham-Carter	サー・チャールズ・ボナム＝カータ大将	1936-1940
Lt.-Gen. Sir William G.S. Dobbie	サー・ウィリアム・ドビー少将	1940-1942
FM Viscount Gort	ゴート子爵	1942-1944
Lt.-Gen. Sir Edmond C.A. Schreibner	サー・エドモンド・シュレブナー少将	1944-1946
Sir F. Douglas	サー・ダグラス	1946-1949
Sir Gerald H. Creasy	サー・ジェラルド・クリーシー	1949-1954
Maj.-Gen. Sir Robert Laycock	サー・ロバート・レイコック将軍	1954-1959
Adm. Sir Guy Grantham	サー・ギー・グランサム海軍大将	1959-1963
Sir Maurice Dorman	サー・モーリス・ドーマン (***)	1963-1964

(*) (**) Maj. Gen. (MG) = Major General とは、少将 (lieutenant general) の下位で准将 (brigadier general) の上位の階級で日本語には訳語がないため、将軍と訳し注記した。

(***) ドーマン総督は、マルタの独立後も 1971 年まで総督として留まった。

(出典) Victor Mallia-Milanes ed., *The British Colonial Experience 1800-1964 – The Impact on Maltese Society*, Amsterdam, 1988, pp.373-4

こうした時代背景の中で、マルタ人としての「ナショナリズム」は展開していった。すでに 18 世紀には、マルタ語に対する特異な愛着とそれに立脚した「ナショナリズム」は芽生えていた。英王室の勸告にもとづき出版の自由が保証された 1838 年、最初のマルタ語新聞の『マルタのあれこれ』(Il-Kawlata Maltija) が刊行された。その新聞自体は短命で終わったが、仕事

を求めて海外に移住したマルタ人が多く住むエジプト、チュニジア、カナダ、オーストラリアでもマルタ語の新聞が刊行された。とくに1859年以降、カイロ、アレキサンドリア、ポートサイドで創刊されたマルタ語新聞は、マルタのジャーナリズムに大きな刺激と感化を与えた。同時期のエジプトは、エジプト政府が国費で送ったフランス留学から帰国した若者たちが帰国して活躍を始めたときでもあり、エジプト文芸復興（al-Nahda）のころである（注29）。エジプトにおけるマルタ語新聞の創刊はそうしたエジプト文芸復興に影響されて展開されたといえる（注30）。

マルタでも詩人ヴァサロ（Ġan Anton Vassallo, 1817-1868）は『マルタ史』（*Storyata' Malta*, 1862）を書き上げ、「大包囲」をモチーフに歴史叙事詩『トルコの軍船』（*Il-Ġifen Tork*, 1852）を完成させた。それは、1565年にマルタ騎士団がオスマントルコの艦隊と大軍を撃破したことを記念してマルタでは毎年祝祭が催されていたことをテーマにしなが、イギリスの支配を批判したものであった。マルタ大学のイタリア語教授でもあった詩人ヴァサロは、イタリアのリソルジメントの文学者たち（注31）に共感しつつ、アラビア語を含めて各国語に精通し、マルタの知識人としての生き方を示した（注32）。

マルタのナショナリズムは、言語ナショナリズムとカトリック主義に基幹していることに特色がある。マルタ語はどうみても次から次と様々な言語が混ざった「混合言語」であることは間違いない。現代のマルタ語を形成するにあたり、大きな役割を果たしたのは下記の6つの言語であると指摘されている（注33）。

1) アラビア語（870年まで）

（フェニキア語やビザンツのギリシャ語からも影響を受けた。）

2) シチリア・アラビア語（870-1243）

（チュニジアのアラビア語に北アフリカのアラビア語が混合。）

3) 新シチリア語（1250-1800）

（南イタリア語にアラビア語、ギリシャ語の他、恐らくロマンス語が混合。）

4) トスカナ語（1450年頃 - 現代まで）

マルタ騎士団の公用語はイタリアのトスカナ地方のトスカナ語であった。

5) フランス語とオック語（1530-1800）

ヴァレッタが建設された後からフランスの侵入以降の短期間に終わった共和国の時代、フランス語が公用語になった。

6) 英語（1800 - 現代まで）

マルタがイギリスに支配されていた時代は英語が公用語であった。

仕事のために英語（地中海英語）を問題なく使いこなしても、家庭ではマルタを話すバイリンガル環境をもち、知識層はイタリア語やフランス語にも精通しているマルタ人にとって、マルタ語はアイデンティティを維持するこころの拠り所でもある。ヴァサロの跡を継いだアツォパルディ（Ġuze' Muscat-Azzopardi, 1853-1927）は「マルタ語文学の父」として、マルタ作

家協会 (Għaqda tal-Kittieba tal-Malti) を創設、会長としてマルタ語文学を発展させた。

1864年、イタリア統一に大きな貢献をした赤シャツ隊隊長にしてかつて両シチリア王国滅亡の指導者であったガリバルディ (Ginseppe Garibaldi, 1807-82) がマルタを訪問、滞在した。その滞在は短いものであったが、マルタのナショナリズムに大きな影響を与えた。ガリバルディは、マルタの民衆の歓喜の声に見送られて、マルタを去っている (注34)。

20世紀になり、詩人ドン・カルム (Dun Karm, 1871-1961)、カルメル派修道士にしてマルタ大学哲学教授のアナスタシオ・クスキエーリ (Anastasio. Cuschieri, 1872-1962)、言語学者ニーナ・クレモナ (Nina Cremona, 1880-1972) の三人の詩人をもって、現代マルタの文学は展開されていく (注35)。とくにマルタ国歌の作詞者でもあるドン・カルムは特異なナショナリズム詩人として知られる (注36)。

イギリスの支配は、結果的にマルタのナショナリズムを文化的にも政治的にも発展させる結果となった。その一方で、イギリスはマルタの地勢的立場を利用してイギリス経済のためのインフラをさまざま準備したことも事実である。1869年、スエズ運河が開通した。これによってイギリスはジブラルタルーマルタースエズを結ぶことに成功した。イギリスはマルタに寄港できることによって、食料・水・船の修復などを可能にさせたが、マルタもこれによって漁業だけではなく海運業に乗り出すことができたのである。1881年にはアングロ・エジプト銀行 (Anglo-Egyptian Bank) がマルタにも設立された。1883年、主として綿花などの輸送のために1931年に廃線になるマルタに鉄道が引かれた。廃線になった後はバスがマルタの主要な交通手段になった。イギリスがマルタを撤退するとき、イギリスはマルタに旧式のバスを置いていった。マルタはそれを補修しながら丁寧に使い、最近までイギリスの旧式バスがそのまま使われていた。

1914年から始まる第一次世界大戦は、マルタが「地中海の看護婦」として機能することを実証したといえる。その一方で、マルタの自治拡大をもとめて、反英闘争も激化していた。6日間暴動 (Sette Giugno) は第一次世界大戦のただ中で起きた暴動として知られる。打開策を求めてイギリスはマルタの議会を招集する他なかった。第一次世界大戦が終結する前年の1917年6月11日、地中海に赴いた駆逐艦「榊」の乗員がドイツ軍のUボートから攻撃され、59名の戦死者がでた。このときの「大日本帝国第二特務艦隊戦死者之墓」がマルタにあることは日本にとって、特筆されることであることを実証するように、早くも1921年4月に後の昭和天皇が皇太子時代にマルタを訪問している (注37)。

1919年、マルタはイギリスの支配下にありながら、自治を認められるようになった。同年、マルタ教員組合 (MUT) が設立され、マルタ人による最初の組合となった。1921年、最初の議会が開かれ、ジョセフ・ハワードが首相に選ばれた。以後、マルタでは議会で首相が選ばれるようになった。1923年にはマルタ国歌の「われらマルタ人」 (Innu Malti) も決められ、公式の場で演奏された。1927年には労働党から首相ストリックランドが選出された。首相はカトリック教会と政治的にも宗教的にも争い、憲法の施行が停止されたが、1932年に首相が交

代になると、憲法は回復した。1933年、マルタにイタリアのファシスト党が影響をもつようになると憲法は後退した。1934年、マルタ語と英語はともに公用語になり、公用語としてのマルタ語の最初の文法書が出版された。1935年にはイタリアから放送されていたファシストのプロパガンダ放送に対抗して、ラジオ放送が始まった。1936年、イギリス統治下で国会議員の選出ができるように憲法が改正された。そして、1939年にドイツがポーランドに侵入し、第二次世界大戦が始まったのである。

1945年まで続く第二次世界大戦は、マルタ島攻防戦を通じてマルタの重要性が認識させた。1940年6月11日、マルタに空爆があり、イタリアのEボート（高速魚雷攻撃艇）がヴァレッタ港を攻撃したが、失敗に終わった。イギリス空軍の輸送機は損傷し、爆撃を受け、修理された。ドイツ軍はイタリア軍と一っしょになってマルタを爆撃した。のちにイギリス政府はそのときのマルタの人々の勇気を讃え、マルタ在住の全住民にジョージ十字勲章を贈った。手術室を完備したイギリスの護衛艦がヴァレッタ港に到着した。マルタは餓死することなく、また降伏もしなかった。1943年、アメリカのフランクリン・ローズヴェルト大統領、イギリス首相のウィンストン・チャーチル、イギリス国王ジョージ6世はマルタを訪問した。マルタからシチリア島への攻撃が始まった。9月4日、イタリアは降伏し、イタリアの艦隊がマルタに逃れてきた。マルタ労働組合と貿易組合が艦隊を迎い入れた。1945年、チャーチル首相とローズヴェルト大統領は、マルタ会談でスターリンに会う前にマルタで会合をもった。

マルタ島攻防戦は、イギリスにとってヨーロッパ戦線の基地として機能した。第二次世界大戦が終わると、1947年にマルタ議会は、結果的にイギリス統治下の憲法を引き継いだ。ポール・ボッフアがマルタ労働党の地滑りの勝利で首相になった。若い野心家のドム・ミントフがマルタ労働党を分裂させたため、エンリコ・ミッツィが首相になったが、首相の座についてから2ヶ月で死去した。政局は混迷していった。マルタではイギリスとの関係をどうするか議会で延々と議論された。

1956年、イギリスと統合するかどうかの国民投票が行われた。ドム・ミントフは首相を辞任し、労働者、警察、イギリス軍との間で対立していた4月18日の労働組合による国民ストライキは停止された。しばらくマルタでは首相不在の状態が続いたが、1962年にジョージ・ボルグ・オリヴァーが首相に就任した。

時代は船舶の時代から航空機の時代に移っていた。いまやイギリスにとって仮想敵国はドイツではなく、チャーチルのいう「鉄のカーテン」の向こう側にいるソ連であった。イギリスはマルタにおける海の必要性を以前ほど認めなくてもよくなったのである。イギリスにとっては、マルタの安定は必要でも、マルタの独立は容認できるものになっていたのである。

[表 3]

イギリス統治下で選出されたマルタの首相		
氏名 (原綴り)	日本語訳	首相年月期間
Joseph Howard	ジョセフ・ホワード	1921年10月-1923年10月
Dr. Francesco Buhagiar	フランチェスコ・ブハギアル博士	1923年10月-1924年9月
Dr. Ugo P. Mifsud	ウーゴ・ミフスト博士	1924年9月-1927年8月
Sir Gerald Strickland	サー・ジェラルド・ストリックランド	1927年8月-1932年6月
Sir Ugo P. Mifsud	サー・ウーゴ・ミフスト	1932年6月-1933年11月
Dr. Paul Boffa	ポール・ボッフア博士	1947年11月-1950年9月
Dr. Enrico Mizzi	エンリコ・ミッツィ博士	1950年9月-1950年12月
Dr. George Borg Oliver	ジョージ・ボルグ・オリヴァー博士	1950年12月-1955年2月
Dom Mintoff	ドム・ミントフ	1955年3月-1958年4月
Dr. George Borg Oliver	ジョージ・ボルグ・オリヴァー	1962年3月-1976年

(参考) Victor Mallia-Milanes ed., *The British Colonial Experience 1800-1964 – The Impact on Maltese Society*, Amsterdam, 1988, p.375

5. 独立後のマルタ

独立後のマルタは、国民党と労働党の間で政権の奪い合いが続き、不安定な政治状況が続いてきた。独立後史の年譜を以下にまとめてみる。

[表 4]

独立後のマルタの主な出来事	
年	出来事
1964年	マルタは国民投票の結果、独立を達成する。大英連邦の一員として主権が認められる。
1968年	中央銀行が設立される。
1970年	マルタはヨーロッパ経済共同体 (EEC) に加盟。
1971年	6月に普通選挙が実施され、労働党を率いるドム・ミントフが首相になる。サー・アンソニー・メイモ (Sir Anthony Mamo) は独立国マルタの最初の高等弁務官になったが、それまではマルタ諸島の高等弁務官であった。イギリスならびに北大西洋条約機構 (NATO) の諸国には軍基地の使用の認可が調印される。
1972年	マルタに駐屯していた連隊は解散。貨幣制度も10分の1にデノミされた。マルタ政府はそれまで自由に行き来できた米国海軍の寄港を禁じる。
1973年	マルタ航空 (Air Malta) が創設。マルタは共和国になったが、大英連邦の一員であり続けた。
1974年	マルタは共和国になり、サー・アンソニー・メイモが初代の大統領に選ばれる。マルタ大学もイギリスの影響を廃止し、完全にマルタ政府のコントロールのもとに置かれる。
1975年	アメリカのバークレー国際銀行 (Barclays Bank International Ltd.) が買収に乗り出し、中央地中海銀行 (Mid-Med Bank) になった。

1976年	アントン・バツティギーグ博士（Dr. Anton Buttigieg）が第2代の大統領になる。普通選挙によりマルタ労働党が勝利し、労働党を率いていたミントフが首相になる。
1977年	エディ・フェネチ・アダミが国民党の党首に選ばれる。
1979年	軍基地の使用期限が終了。イギリス軍は去り、3月31日に最初の自由の日が祝われる。
1981年	マルタ労働党は、国民党が有権者の絶対多数を抑えていたにもかかわらず、普通選挙により大多数の議席を獲得したため、国民党は選挙違反と弾劾。ドム・ミントフ首相が辞任し、首相にカルメロ・ムフシド・ボニーチ（Dr. Carmelo Mifud Bonnici）が就任する。
1982年	アガサ・バーバラ（Agatha Barbara）が第三代目の大統領にしてマルタで最初の女性大統領に就任。
1984年	教員組合が7週間のストライキを敢行し、公立学校の授業料を無料にする。
1987年	5月の普通選挙により、国民党が勝利したのを受けて、エディ・フェネチ・アダミ（Dr. Eddie Fenech Adami）が首相になる。
1988年	自由港会社（Freeport Corporation）が設立される。1798年のマルタ出国以来、始めてマルタ騎士団が最初の集会をもつ。この会談は、後に「ヤルタからマルタ」といわれ、歴史的な出来事として話題になった。
1989年	アメリカ合衆国とソ連でマルタで会談し、冷戦が終結する。マルタ政府は正式にヨーロッパ共同体（EC）のメンバーになることを申請する。
1990年	ヨハネ・パウロ2世がローマ法王として始めてマルタを訪問する。ガイド・マルコ（Guido de Marco）が国連の第45回国連総会の議長に選出される。
1991年	マルタ・ケーブル・テレビ（Malta Cable Television）が営業を開始する。新マルタ国際空港ターミナルの落成式が行われる。
1992年	エリザベス2世とフィリップ殿下がマルタ国とマルタ国民すべてにジョージ十字勲章を授与するためにマルタを訪問する。欧州連合（EU）がマルタの加盟を認める報告をまとめる。
1994年	ウーゴ・ミフスド・ボニーチ（Dr. Ugo Mifsud Bonnici）が第5代大統領に選ばれる。
1996年	10月の普通選挙でマルタ労働党が勝利する。マルタの欧州連合加盟がマルタ労働党の政策が原因で停止状態になる。労働党は、欧州連合に近づき、マルタが自由貿易圏となるが、欧州連合には正式加盟しないという政策であった。
1999年	ガイド・デ・マルコがマルタの大統領に指名される。
2004年	5月1日、欧州連合に正式に加盟する。
2008年	欧州共通通貨としてのユーロ導入。

（参考出典）<http://www.aboutmalta.com/history/time-Line.htm> ならびに Warren G. Borg, *Historical Dictionary of Malta*, London, 1995, pp.xv-xxi より作成。

マルタの政情は、けして安定しているとはいえない。国民の多くが何らかの意味で観光業に従事し、いまや海運業の時代は終わったといえる。オーストラリアを始め、海外に仕事を求めて移住する若者も少なくない。しかし、彼らは故郷のマルタにいつか帰る日を夢に、そして現実に帰ってくる。マルタのカーニヴァルの主役はそうした海外組のマルタ人であることも驚きである（注38）。

国民幸福度は抜きんでて高いのもマルタである。言語的にイタリアに属さず、宗教的に北アフリカに属さないマルタ人のアイデンティティはある意味で謎だらけである。名前からも彼らの出身は分かることが少なくないうえに歴史的に考えてどうみてもマルタ人の存在も疑わざる

を得ないのである（注 39）。マルタの小学校は英語とイタリア語を取り入れたカリキュラムが特徴的である（注 40）。マルタでは高等教育はすべて英語で行っており、英語が出来ないマルタ人は仕事もなく、生きていけないことを意味している。その意味では、マルタ語と英語の完全なバイリンガル国家なのである。その一方で、マルタ語に対する熱い思いは国民の共通認識であり、国旗と国歌に対する愛着は毎年、各地で行われているカーニヴァルでも体験できるものである。そして、その根底に出身の村々、町々に対する郷土愛があり、カーニヴァルは各村、各町を連帯させる役割を果たしているといえる。（注 41）

二度の世界大戦のときは軍事的に重要な拠点であったマルタは大きな軍事力をもたない軍事小国であり、近隣とはけして争わないという政治姿勢に特色がある。隣国リビアが国際的に孤立したときも、マルタはリビアから石油を含めて経済的に援助を受け、リビアからの船舶の寄港を認めてきた。マルタ労働党が EU への加盟を拒否し、通商貿易において自由貿易のみを望んだのは、リビアとの良好な関係を維持していくことを棄てようとしなかったことと関係している。その一方で、保守的なまでのカトリック国であり、カトリックの教えるままに、原則的にイタリアまでが放棄した「離婚の自由」も認めず、墮胎と避妊も容認していない。

マルタの言語ナショナリズムは特筆すべきである。マルタ語をかたくなに守ろうという姿勢はいまも変わらない。マルタ語は、多民族国家でありイギリスの言語植民地主義に対抗するマルタ人としてのアイデンティティの源なのである。第二次世界大戦後も多くのマルタ語の詩作が発表され、刊行されてきた（注 42）。

6. マルタ史についての考察

マルタ史研究については、まだ概説がまとまったところといえなくもない。確かに騎士団の研究はそのなかでも抜きん出ているが、肝心のラテン語やフランス語などで書かれた原典となる史料のほとんどがまだ写本のままなのである。近代史研究で不可欠な新聞や雑誌なども発行部数が少なかったことに加え、リプリント版が出版されることはない。マルタの書店ではマルタ語の本はたいてい 2 階で扱っており、けして一般読者が読むものではないかのようだ。

マルタの歴史は単に国民史のみに留まるものではない。古来より、地中海世界の歴史に深く関わってきたのみならず、諸外国の干渉や支配を受けてきた。ちょっと列挙しただけでも 1964 年のマルタ共和国の独立まで、フェニキア、カルタゴ、ローマ、ビザンツ、アラブ、ノルマン、スペイン、騎士団、フランス、イギリスの支配を受けてきた。とって、農耕地として豊かなわけではない。18 世紀でもせいぜいタバコと綿花を生産しているくらいであるし、現在でも自給できるまでに生産量を確保できるのはジャガイモくらいである。その意味では、近隣諸国と交易しないと自分たちの生活も維持できない状態なのである。

マルタの歴史は、主として南欧と北アフリカ・中東と深く関わってきた。そして、双方の地域を結びつけていた地中海は、世界の歴史を左右してきたところである。地中海の覇権をめぐる

て争ってきたキリスト教世界とイスラム教世界の抗争は、その意味で舞台は地中海から外れてきても、続いているといえなくもないのである。口語アラビア語に通じていれば、マルタ語を耳から理解することは困難でもない。その一方で、口語アラビア語を耳にするマルタ人はそのほとんどが理解できるのである（注43）。しかし、マルタで食する料理の大半はイタリア料理である。そして、タコの Pasta 料理が普通に提供されているのを目撃すると、「悪魔の動物」、「海の悪魔」といって口にしてこなかった南欧以外のヨーロッパとは違う文化をもっているのである。

愛国心を育てようとする19世紀以降の歴史観、歴史教育から始まった国民史だが、自国に不利な歴史を教えようとしないと、結果的に真実の歴史が見えなくなることがしばしばおきるのである。大国になればなるほど、何らかの意味で暗い歴史を隠しもっている。小国マルタの歴史は、大国が積み重ねてきた歴史の裏面の真の姿を映し出してくれるともいえる。自国の自己肯定が満載してある歴史ではなく、世界の歴史の中での位置付けが求められていることを示唆してくれるのが、マルタの歴史なのである（注44）。

【注】

- (1) Mario Cassar, *The Surnames of the Maltese Islands – An Etymological Dictionary*, Hal Tarxien(Malta), 2003 はそうしたときに便利な地名辞典である。
- (2) ミケランジェロ・メリージ・ダ・カラヴァッジョとマルタの関係は、Didier Destremau, *Le Fabuleux Destin de Malte*, Paris, 2006, pp.129-136 参照のこと。
- (3) Victor Mallia-Milanes ed., *Hospitaller Malta 1530-1798*, Msida (Malta), 1993, pp.475-482
- (4) これについて、すでに関根謙司「マルタ文芸復興とカトリシズム」、『地中海世界と宗教』、慶応義塾大学地域研究センター、1989、272-275頁で紹介したことがある。
- (5) Oliver Friggieri, “Literature” in Henry Frendo & Oliver Friggieri ed., *Malta-Culture and Identity*, Ministry of Youth and the Arts (Malta), 1994, p.52
- (6) Joseph Cassar-Pullicino et Micheline Galley, *Femmes de Malte dans les Chants traditionnels*, Paris, 1981, p.136 ここに収められているアラビア文字によるマルタ語は、独立体文字のみが使用されている。
- (7) Oliver Friggieri, “Literature” in Henry Frendo & Oliver Friggieri ed., *op.cit.*, p.52
- (8) Oliver Friggieri, *La Cultura italiana a Malta*, Firenze, 1978, pp.8-11
- (9) A.J.Arberry Compiled, *A Maltese Anthology*, Oxford, 1960, p.xxvi
- (10) キプロス島のマロン派キリスト教の村でいまでも使用されているキプロス・アラビア語の言語調査を行った Alexander Borg はマルタ語との共通語彙があることを指摘している。Alexander Borg, “Language” in Henry Frendo & Oliver Friggieri ed., *op.cit.*, pp.27-50 所収
- (11) マルタ騎士団の食生活については、Pamela Parkinson-Large, *A Taste of History – The Food of the Knights of Malta*, Lija(Malta), 1995 参照。また、Victor Mallia-Milanes, *Venice and Hospitaller Malta 1530-1798 – Aspects of a Relationship*, Malta, 1992 はヴェネツィアとマルタとの交易の関係を論じたもので、アドリア海でマルタが果たした功績が分析されている。
- (12) John Montalto, *The Nobles of Malta – 1530-1800*, Valletta, 1979 に貴族まるだしの騎士団の生活がよく描かれている。

- (13) Hugh W. Harding, "Law" in Henry Frenco & Oliver Friggieri ed., *op.cit.*, p.211
- (14) アンドレ・マルロー編, 小宮正弘訳『ナポレオン自伝』, 朝日新聞社, 67頁～68頁の2004年の1798年6月13日を参照のこと。なお, ナポレオン自身は自伝を書いてはいない。本書はあくまでナポレオンが残した日記や書簡を作家アンドレ・マルローが編纂したものである。
- (15) Didier Destremau, *op.cit.*, pp.209-214
- (16) *ibid.*, p.215. なお, 同書の著者は1998年から2002年まで在マルタのフランス大使を務めた人物で, 同書の末尾に多くの参考文献を紹介しているが, 史料の出典を明らかにしておらず, 真偽のほどは不明である部分も少なくない。なお, このエピソードは, マルタでも耳にした逸話でもある。
- (17) A.V.Laferla, *The Story of Man in Malta*, Malta, 4th Edition, 1972, pp.149-149
- (18) *Ibid.*, p.151. なお, 本書にはそのとき送付した書簡の英訳が収められている。
- (19) Joseph S.Abela, *Malta-A Panoramic History*, San Ġwann (Malta), Second Edition, 1999, p. 173 に愛国者の銅像の写りが収録されている。
- (20) Victor Mallia-Milanes ed., *The British Colonial Experience 1800-1964 – The Impact on Maltese Society*, Amsterdam, 1988, p.1
- (21) Joseph M. Brincat, "Language and Demography" in Stanly Flrinni & Victor Mallia-Milanes ed., *Malta – A Case Study in International Cross-Currents*, Malta, 1991, p.102
- (22) CIA World Factbook (updated on August 22, 2013)
<https://www.cia.gov/library/publications/the-world-factbook/geos/mt.html>
- (23) 地中海と紅海・インド洋を水路でつなげることは古代エジプトからの念願であり, 何度も計画が練られたことはよく知られている。
- (24) George Percy Badger, *Description of Malta and Gozo*, Malta, 1838 はその一冊である。なお, 本書は, 1989年にヴァレットでファクシミリ版が500部限定で刊行されている。
- (25) その原文は, Donald Sultana, *The Journey of Sir Walter Scott to Malta*, New York, 1986 に Appendix (pp.110-141) として収められている。
- (26) Ahmad Fāris al-Shidyāq, *al-Wāsita fī Ma'rifa Ahwāl Mālta*, Constantinople, 1299H (1882) なお, 筆者が参照した原典は第二版であり, シドヤークはイスラームに改宗し, コンスタンティノープルに移住してからのものである。第二版には, シドヤークの『ヨーロッパ滞在記』(*Kash al-Muhibba'an Funūn Ūrubā*) も収められている。
- (27) この問題について, かつて筆者は, 関根謙司「マルタにおけるシドヤークーイスラームへの“回帰”をめぐって－」, 『文京女子大学研究論集』(1993, Volume 3, Number 1) でこの問題は詳しく扱った。また, 英文の博士論文として未刊行ながら, Mohamed Bakir Alwan, AHMAD FARIS ASH-SHIDYAQ AND THE WEST, Indiana University, Ph.D., 1970, UMI(University Microfilms International), Ann Arbor がある。
- (28) Ahmad Fāris al-Shidyāq, *Kitāb al-Sāq'alā al-Sāq fīmā huwa al-Fāriyāq*, Paris, 1855 フェアリーヤークとは自分の名前のフェーリス・(アッ)・シドヤークを合成したもので, シドヤーク自身, 同書にフランス語のタイトルをつけ, LA VIE ET LES AVENTURES DE FARIAC としている。なお, 同書にはフランスの研究家 R. Khawam による仏訳があり, こちらはアラビア語原文の直訳に近い Faris Chidyaq, *La Jambe sur la jambe*, Paris, 1991 となっている。
- (29) 関根謙司『アラブ文学史－西欧との相関』, 六興出版, 1979年, 71-80頁, 関根謙司「アラブの覚醒」, 前嶋信次編『オリエント史講座 6－アラブとイスラエル』, 学生社, 1986年所収を参照。
- (30) Edward Fenech, *Contemporary Journalistic Maltese*, Leiden, 1978

- (31) マンツォーニ、レオパルデイ、ダヌンツィオ、デ・アミーチスなどのイタリア統一に向けた愛国的作品とイタリア語への愛着は、ヴァッサリのみならずマルタの文学者に大きな影響を与えた。Oliver Friggieri, *La Cultura italiana a Malta*, Firenze, 1978
- (32) Oliver Friggieri, *Storia della Letteratura maltese*, Milazzo, 1979 (1986)
- (33) Geoffrey Hull, *The Malta Language Question – A Case Study in Cultural Imperialism*, Valletta (Malta), 1993, pp.300-301
- (34) Oliver Friggieri, *Movimenti Letterari e Consocienza romantica maltese (1800-1921)*, Malta, 1979, pp.38-39
- (35) 関根謙司「マルタ文芸復興とカトリシズム」、『地中海世界と宗教』、慶応義塾大学地域研究センター、1989 に彼ら詩人たちの作品が抄訳されている。
- (36) 関根謙司「マルタ語復興運動とドン・カルムの詩的世界」、『オリエント』（平成2年3月）にドン・カルムの詩作品が日本語に翻訳されている。
- (37) これについては、片岡覚太郎著、C.W. ニコル編、『日本海軍地中海遠征記―若き海軍主計中尉の見た第一次世界大戦』、河出書房新社、2001/2006、紀脩一郎、『日本海軍地中海遠征記―第一次世界大戦の隠れた歴史』、原書房、1979/2003 がある。
- (38) Vicki Ann Cremona, “Carnival in Gozo: Waning Traditions and Thriving Celebrations” in *Journal of Mediterranean Studies*, volume 5, Number 1, 1996
- (39) Henry Frendo, “National Identity” in Henry Frendo & Oliver Friggieri ed., *Malta-Culture and Identity*, Ministry of Youth and the Arts (Malta), 1994, p.21 で Frendo は、同じく西欧で幸福度の高いルクセンブルクと比較し、「フランス人でもなく、ドイツ人でもなく、ベルギー人でもない」という言葉をもじって、「イタリア人でもなく、イギリス人でもなく、アラブ人でもない」のがマルタ人だとその特異なアイデンティティを論じている。これについては、Henry Frendo, “Language and Nationhood in the Maltese Experience – Some Comparative and Theretical Approaches” in Roger Ellul-Micallef, *Collected Papers*, University of Malta (Msida), 1992, pp.439-471 でもさらに詳しく論じている。
- (40) 例えばマルタで刊行されているマルタ語の入門書には小学4年生の時間割として下記のように紹介されている。驚くほどの外国語（英語、イタリア語、フランス語）重視のカリキュラムである。

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
8：30	マルタ語	英語	イタリア語	算数	宗教
9：30	英語	算数	化学	物理	体育
10：30	算数	マルタ語	化学	宗教	芸術
11：30	フランス語	物理	英語	マルタ語	生物
昼 食					
13：00	宗教	化学	算数	イタリア語	フランス語
14：00	生物	体育	英語	イタリア語	算数

Antoinette Camilleri, *MERHBA BIK – Welcome to a course in Maltese for foreigners*, Mgarr, 1997, p.106

- (41) “Carnival in Malta and Gozo” (<http://www.maltamedia.com/features/karnival/index.shtml>)
- (42) Oliver Friggieri compiled, *Cross Winds – An Anthology of Post-war Maltese Poetry*, Paisley, 1980 には著名な第二次世界大戦後のマルタ語の詩作が収められている。ちなみに、その序文は示唆に富んだ解説でもあり、筆者もことあるごとに参考にした。
- (43) マルタ人にとって耳から聞く口語アラビア語は容易に理解できるが、それがどこの言語なのか正確には知らないようだ。筆者はかつてマルタ国際空港からリビアの知人に電話したことがあるが、筆者の話す北アフリカのアラビア語をほぼ完全に理解しながら、マルタ航空の客室乗務員といえどもどこの言語か分からなかったらしく、わざわざ尋ねられたほどだ。
- (44) マルタの歴史を古代から現代まで史料を駆使して本格的な研究を志す場合、必要とされるおびた

だしい言語に啞然とする人も少なくない。少なくとも西欧近代諸語(イタリア語, フランス語, 英語, カステイリア語)はもちろんのことフェニキア語, ギリシャ語, ラテン語, ヘブライ語, アラビア語, 中世ラテン語, ノルマン=イタリア語は必要となるだろう。しばしば癖のある書き方をする写本の文字は, 専門家でも判読が困難な場合が多い。いきおい狭い範囲の時代のみ研究に陥りやすい。本稿を完成させるにあたり, 敢えて筆者は原史料を参照しなかったことを最後に注記しておきたい。

【参考文献】

(昨年度に上梓した「マルタ史試論－1」には参考文献は明記されておらず, 本稿で「マルタ史試論－1」ならびに「マルタ史試論－2」の双方で使用した文献を列挙することを記載したため, 以下に筆者が直接, 参照できた文献を紹介することにする。)

1. 書誌・専門雑誌

- (1) Arnold Cassola ed., *The Biblioteca Vallicelliana - Regole per la Lingua maltese*, Valletta, 1992
- (2) *Bibliography of Maltese Bibliographies*, Msida(Malta)
- (3) Paul Xuereb, *Meditensia*, Misda(Malta), 1974
- (4) *Journal of Mediterranean Studies*, University of Malta (Msida)1991- (年2回刊行)
- (5) *Library of Mediterranean History*, Msida (Malta), 1994-

2. ガイドブック・年表

- (6) Carolyn Bain, *Lonely Planet – Malta & Gozo*, London, 2000
- (7) *Le guide du Routard*, Malte, Paris, 2006/7
- (8) *Malta and the Islands of Gozo and Comino*, Luqa (Malta), 2007
- (9) <http://www.aboutmalta.com/history/time-Line.htm>

3. 通史

- (10) Brian Blouet, *The story of Malta*, London, 1967 (Malta, 1993)
- (11) Didier Destremau, *Le Fabuleux Destin de Malte*, Paris, 2006
- (12) Henry Frendo & Oliver Friggieri ed., *Malta-Culture and Identity*, Ministry of Youth and the Arts (Malta), 1994
- (13) Jacques Godechot, *Histoire de Malte*, Paris, 1952
- (14) Joseph A. Abela, *Malta – A Panoramic History*, SanĠwan(Malta), 1997
- (15) A.V.Laferla, *The Story of Man in Malta*, Valletta (Malta), 4th Edition, 1972
- (16) Stanley Fiorini & Victor Mallia-Milanes ed., *Malta – A Case Study in International Cross-Currents*, Malta University Publications (Msida, Malta), 1991

4. 時代史・分野史

(1) 古代 (巨石文化時代)

- (17) Aquilina Ross ed., *Insight Guide Malta*, APA Publication LTD.(Malta), 1991

(2) 中世 (アグラブ朝時代, ノルマン朝時代)

- (18) Anthony T. Luttrell, *Medieval Matla - Studies on Malta before the Knights*, London, 1975
- (19) Girolamo Caracausi, *Arabismi Medievali di Sicilia*, Palermo, 1983
- (20) Michele Amari, *Biblioteca Arabo-Siculo*, Palermo, 1982 (1881のリプリント版)
- (21) Michele Amari, *Le Epigraph arabiche di Sicilia*, Rome, 1974 (リプリント版 Palermo, 1971)
- (22) Mohamed Talbi, *L'Émirat Aghlabide*, Paris, 1966, アラビア語訳は Al-Munjī al-Sayyādi 訳, Al-

- Dawla al-Aghlabīya*, Beirut, 1985
- (23) Yākūt al-Rūmī, *Mu'jam al-Buldān*, Beirut, 1977
- (3) 近世（マルタ騎士団の時代）
- (24) Andrew P. Vella, *The University of Malta – A Bicentenary Memorial*, Msida(Malta), 1969
- (25) Arnold Cassola, *The Siege of Malta (1565) and the Istanbul State Archives*, Valletta(Malta), 1995
- (26) Charles Stephenson, *The Fortifications of Malta 1530-1945 (Fortress)*, Osprey Publishing, 2004
- (27) John Montalto, *The Nobles of Malta – 1530-1800*, Valletta, 1979
- (28) Godfrey Wettinger, *The Jews of Malta in the Late Middle Age*, Valletta, 1985
- (29) L'Abbé de Vertot, *The History of the Knight of Malta*, London, 1823
- (30) Oliver Friggieri, *La Cultura italiana a Malta*, Firenze, 1978
- (31) Victor Mallia-Milanes, *Hospitaller Malta, 1530-1789*, Msida(Malta), 1993
- (32) Victor Mallia-Milanes, *Venice and Hospitaller Malta 1530-1798 – Aspects of a Relationship*, Malta, 1992
- (4) 近代（ナポレオン時代, フランスの統治時代, イギリスによる植民地時代）
- (33) Ahmad Fāris al-Shidyāq, *Kitāb al-Sāq 'alā al-Sāq fīmā huwa al-Fāriyāq*, Paris, 1855
- (34) Faris Chidyaq, René Khawam tr., *La Jambe sur la jambe*, Paris, 1991
- (35) Ahmad Fāris al-Shidyāq, *al-Wāsita fī Ma'rifa Ahwāl Mālta*, Constantinople, 1299H (1882)
- (36) Donald Sultana, *The Journey of Sir Walter Scott to Malta*, New York, 1986
- (37) George Percy Badger, *Description of Malta and Gozo*, Malta, 1838
- (38) Victor Mallia-Milanes ed., *The British Colonial Experience 1800-1964 – The Impact on Maltese Society*, Amsterdam, 1988
- (5) 現代（マルタの独立）
- (39) Jeremy Boissevain, *A Village in Malta – Fieldword Edition*, New York, 1970
- (40) Ronald G. Sultana & Godfrey Baldacchio ed., *Maltese Society – A Sociological Inquire*, Msida (Malta), 1994
- (6) 文化・文学
- (41) A. J. Arberry, *A Maltese Anthology*, Oxford, 1960
- (42) A.J. Arberry, *DUN-KARM – Poet of Malta*, Cambridge, 1961
- (43) Edward Fenech, *Contemporary Journalistic Maltese*, Leiden, 1978
- (44) Geoffrey Hull, *The Malta Language Question – A Case Study in Cultural Imperialism*, Valletta (Malta), 1993
- (45) Joseph Aquilina, *Maltese Linguistic Surveys*, The University of Malta, 1976
- (46) Joseph Cassar Pullicino, *Studies in Maltese Folklore*, Msida(Malta), 1992
- (47) Joseph M. Brincat, *Languages of the Mediterranean – Substrata, The Islands, Malta*, Msida (Malta), 1993
- (48) Joe Friggieri, *Hrejjeġ Għal Żmiena*, Pieta(Malta), 1996
- (49) Mohamed Bakir Alwan, *AHMAD FARIS ASH-SHIDYAQ AND THE WEST*, Indiana University, Ph.D., 1970
- (50) Oliver Friggieri, *La Cultura italiana nell'800 e nel primo '900*, Roma, 1977
- (51) Oliver Friggieri, *La Cultura italiana a Malta*, Firenze, 1978
- (52) Oliver Friggieri, *Storia della Letteratura maltese*, Milazzo, 1979 (1986)

- (53) Oliver Friggieri, *Movimenti Letterari e Consocienza romantica maltese (1800-1921)*, Malta?, 1979
- (54) Oliver Friggieri, *DUN KARM – Il-Poeżiji Miġbura*, Valletta, 1980
- (55) Oliver Friggieri, *Il-Ktieb tal-Poeżija Maltija – Testi magħżula u miġbura bi studju kritiku*, Valletta, 1987
- (56) Pamela Parkinson-Large, *A Taste of History – The Food of the Knights of Malta*, Lija(Malta), 1995
- (57) Paul Xuereb tr., *Tales for our Times*, Valletta(Malta), 2004
- (58) Tarcisio Zarb, *Folklore of an Island – Maltese Threshold Cutoms*, San Gwann(Malta), 1998
- (59) Arnold Cassola, Godwin Degabriele, Manwel Mifsud, Paul Pace, Arthur Sammut, *Qawsalla – Antoloġija tal-Letterature Maltija*, L-Università ta' Malta, 1993
5. 地理・社会
- (60) Charles Fiott, *Towns and Villages in Malta and Gozo*, Rabat, Part1=1994/Part2=1996/Part3=1997
- (61) Mario Cassar, *The Surnames of the Maltese Islands – An Etymological Dictionary*, Hal Tarxien(Malta), 2003
6. 辞書・事典, 論文集
- (62) Antonio Emanuele Caruana, *Vocabolario della Lingua Maltese*, Valetta(Malta), 1903
- (63) D. Giuseppe Barbera, *Dizionario Maltese-Arabo-Italiano*, Beyrouth, 1939-40
- (64) Warren G. Berg, *Historical Dictionary of Malta*, Maryland, 1995
- (65) Roger Ellul-Micallef, *Collected Papers*, University of Malta (Msida), 1992
- (66) Warren G. Borg, *Historical Dictionary of Malta*, London, 1995
7. 筆者による論文・著作
- (67) Kenji Sekine, *Intellectuals in Malta Between West and East*, 『慶応義塾大学日吉紀要—言語・文化・コミュニケーション』(第5号)
- (68) 関根謙司『アラブ文学史—西欧との相関』, 六興出版, 1979年
- (69) 関根謙司「マルタ文芸復興とカトリシズム」, 『地中海世界と宗教』, 慶応義塾大学地域研究センター, 1989
- (70) 関根謙司「マルタ語復興運動とドン・カルムの詩的世界」, 『オリエント』(平成2年3月)
- (71) 関根謙司「マルタにおけるシドヤーク—イスラームへの“回帰”をめぐる—」, 『文京女子大学研究論集』(1993, Volume 3, Number 1)
- (72) 関根謙司「古代マルタ文明の謎」, 『歴史読本ワールド』('94・5), 1994, 新人物往来社

(2013.9.25 受稿, 2013.11.5 受理)